

「同仁会」は、清国や韓国などのアジア諸国に対して近代医学を普及させることを目的として、1902（明治35）年に発足した医療支援団体である。

- ①アジアにおける医学校および医院の設立
- ②日本人医師・薬剤師等の派遣
- ③医事衛生薬品に関する調査機関の設置
- ④アジア諸国で日本人医師が移住・開業することを扶助する
- ⑤日本に来る医学・薬学留学生の支援
- ⑥アジア諸国に向けた医事薬学関連図書の刊行

を事業の柱とした。西洋医学を摂取して制度化していた日本から、西洋医学の浸透していないアジア諸国に医学の知識・技術・人材を提供する事業を構想。



年	同仁会	内外の動き
1901 (明34)	夏、近衛篤麿・片山國嘉・北里柴三郎・岸田吟香が中心となり同文医会を結成。	義和団事件に関する最終議定書（辛丑条約）締結。
1902 (明35)	この年はじめ、亞細亜医会結成。同文医会と亞細亜医会が合流して同仁会（長岡護美会長）が創設。8月末には、会員2千名超。	北京公使団、義和団事件に関し講和条約附帯議定書（賠償金分配に関して）調印。
1903 (明36)	清・韓・シャムに医師を派遣。	露軍、奉天省城を占領。
1904 (明37)	会長・長岡護美の辞任を受け、大隈重信、会長就任。広島・対馬・漢口・營口に支部開設。漢口同仁医院開設。	日露戦争勃発。第一次日韓協約締結。
1906 (明39)	清国人留学生を対象とした東京同仁医薬学校を早稲田大学構内に設立。『同仁』を創刊。大阪・上海・平壤に支部開設。大邱同仁医院竣工。日露戦争時の安東・營口両兵站病院を引き継いで同仁医院とする。平壤医院開院。	南満洲鉄道株式会社設立の勅令公布。
1907 (明40)	大邱同仁医院開院。安東同仁医院附属支那街出張所を開設。營口同仁医院、清国人街に分院開院。	第三次日韓協約締結。
1910 (明43)	同仁会経営の広済・大邱・平壤・龍山医院を朝鮮総督府に移譲。安東同仁医院を満鉄に移譲。	韓国併合に関する日韓条約調印。中国東北部に肺ペスト流行（～1911）。
1911 (明44)	東京同仁医薬学校閉校。辛亥革命の中、漢口同仁医院は傷病軍民の治療を実施。同仁会、漢口へ救護班を送る。	中国東北部のペスト流行に対して内務省、北里柴三郎を派遣。日清共同防疫會議。満鉄、奉天の満鉄附属地に南満医学堂設立。辛亥革命起こる。
1912 (大1)	營口同仁医院を満鉄に移譲。	中華民国建国（孫文、臨時大總統に就任）。袁世凱第2代大總統に就任。
1914 (大3)	日華同仁医院を北京に開設し、医院拡張に着手（第2期工事）。久邇宮邦彦、総裁就任。	第一次世界大戦勃発。日本、ドイツに宣戦布告。日本、山東出兵、青島占領。独立第18師団の撤退完了（平時編成へ）。この年、ロックフェラー財團China Medical Boardを設立。
1916 (大5)	「医院設立十年計画」を策定。衆議院に補助金を申請して採択される。	袁世凱死去。この年、China Medical Board、北京に医学校・病院建設開始。
1918 (大7)	第一次世界大戦後の不況により、寄付募集が困難になる。補助金の下付を受け始める。	日華学会創立。日本、シベリア出兵を宣言。
1921 (大10)	北京医院に施療所を開設。漢口同仁医院竣工。	中国共産党成立。北京協和医学校開講式。
1922 (大11)	大隈重信没（丹波副会長が会長職代理）。	山東懸案解決に関する条約締結。第一次奉直戦争勃発。
1923 (大12)	漢口同仁医院、正式開院。	「対支文化事業特別会計法」成立。満鉄地方部学務課『対支文化事業に関する支那側の希望』刊行。関東大震災。
1925 (大14)	内田康哉会長就任。丹波副会長辞任。入澤達吉副会長に就任。青島と济南の病院経営を外務省より受諾。病院を移管される。	孫文死去。日本文化侵略反対大同盟会開催。東方文化事業総委員会発足。
1926 (昭1)	神田区仲猿楽町の日華学会内に事務所移転。	対支文化事業特別会計法改正案通過。東方文化事業総委員会章程決定。国民政府「北伐宣言」（第一次北伐）。
1927 (昭2)	中国人医薬学生懇話会開催。漢口医院避難民救護事業に従事。北京交民衛生試験所の経営着手。青島医院で中華民国医師講習会開催。济南医院長牧野融、中国人負傷者治療。治療費について日本赤十字社と交渉。	蒋介石、漢口医院に部下を見舞う。漢口事件。蒋介石、共産党員の肅正（上海クーデター）。第一次山東出兵。東方文化事業総委員会定期総会開催。北京人文科学研究所開設。
1928 (昭3)	同仁会と日華学会共催で中国人留学生の種痘。中国人負傷兵の救護費用4,500円を日本赤十字社より济南医院へ送付。	蒋介石北伐を再開。第二次山東出兵。济南事件。第三次山東出兵東方文化事業総委員会中国側委員、济南事件で総辞職。張作霖爆殺事件。北伐完成。
1930 (昭5)	同仁会・日華学会共催で中国人留学生にチフス予防注射実施。漢口医院、中国医師講習会開催。	中原大戦開始。
1931 (昭6)	同仁会・日華学会・東亜予備校共同で、中国人留学生にチフス予防注射を実施。本部・漢口医院・青島医院、漢口の水害に救護班を派遣。満洲事変による反日感情悪化のため水害救護を拒否され、一部診療班引き揚げる。	上海自然科学研究所設立。長江、珠江、黄河、淮河流域で大水害。洪沢榮一、中国水害同情会設立。同義捐金など、中国政府は受け取り拒否。柳条湖事件。
1932 (昭7)	東京に同仁会診療所を開設（在日中国人向け）。	上海の日本海軍、閩北を総攻撃（上海事変）。満洲國成立。松花江の大洪水。
1933 (昭8)	同仁会北京医院は、中国人患者途絶。	山海關事件。熱河侵攻。「対支文化事業」の一環として「対満文化事業」審査委員会第一回会合開催。
1934 (昭9)	内田会長辞任。林權助会長就任。北京・济南・青島・漢口医院、貧困者施療を開始。青島にて同仁会第一回医学大会開催。	共産党中央・紅軍長征開始。
1935 (昭10)	青島医院、伝染病棟建設。	冀東政権成立。
1936 (昭11)	北京医院、巡回診療開始。	西安事件。
1937 (昭12)	北京医院閉鎖。漢口医院内地引揚。宮川米次、衛生事情調査のため中国へ。	蘆溝橋事件。第2次上海事変。国民政府、日中戦争につき國際連盟に提訴。朱徳、インドのネルーに医療援助要請。外務省文化事業部、調査のため清野謙次、吉川幸次郎らを北京に派遣。日本軍、南京占領。
1938 (昭13)	副会長に児玉謙次と宮川米次就任。中支第一（南京）、第二（上海）、第三（石家庄）、第四（太原）診療班派遣。北支防疫班（高木逸磨班長）・中支防疫部（谷口臘二部長）派遣。	国民党中央、政府機関の武漢撤退と重慶移転を決定。外務省文化事業部、東大教授らを文化代表者団として北京に派遣。インド国民会議派は県の医療使節団コートニスら香港到着。武漢・重慶で医療活動。対支文化事業、興亜院へ移管。
1939 (昭14)	北京に華北支部を、上海に華中支部を各々創設。華北支部長に高木逸磨、華中支部長に笹井秀恕就任。林權助死去。近衛文麿会長就任。	日本軍、海南島上陸。インド医療使節団、延安着。延安・華北前線で医療活動。日本軍、重慶爆撃開始。
1940 (昭15)	宮川米次、国民政府成立慶祝国民使節として訪中。	汪精衛、国民政府を樹立。日本軍、仏印進駐。
1941 (昭16)	興亜院より青島の東亜医科学院の経営を継承。蒙疆支部開設。	太平洋戦争勃発。
1942 (昭17)	海南島支部開設。支部長下條久馬一。夏頃から同仁会上海医科大学設立計画が出る。無錫診療防疫班結成式。	興亜院、大東亜省に吸収合併。日本軍、燕京大学・協和医科大学を封鎖。日本軍シンガポール占領。東亜医学会設立。
1943 (昭18)	『同仁会四十年史』刊行。	対支文化事業特別会計法廃止。
1944 (昭19)	青島東亜医科学院を青島医学専門学校へ改称（5年→4年修業年限）。同仁大学開校式（上海）。	日本軍、大陸打通作戦開始。東亜医学大会、上海・南京にて開催。
1946 (昭21)	GHQ、軍国主義者の公職追放及び超国家主義団体の解散を命令。その中に同仁会も含まれた。	極東国際軍事裁判開始。外務次官、新聞社・出版社に「支那の呼称を避けることについて」の文書を送達。文部次官、大学・専門学校に同様文書送達。

【第五～九卷】⑪〈雑誌〉『同仁会報』1～18冊（同仁会、1940～44年）

【別巻】

⑫『中北支一ヶ月の旅（附録：支那事変上海戦勃発當時中国救護班の活動（上海市救護委員会医務組工作報告）』（伊藤正雄著、帝国社臓器薬研究所、1939年）

*解題、総目次

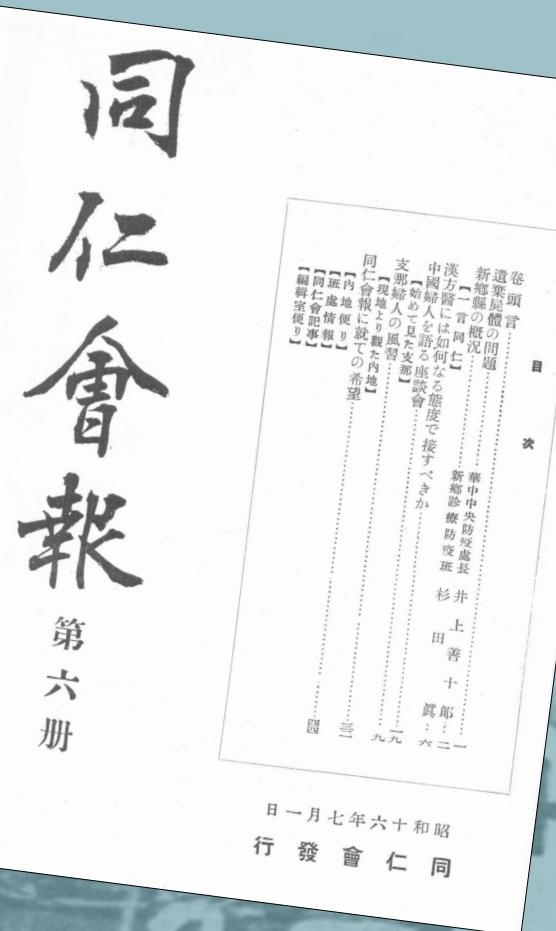
⑪『同仁会報』

本誌が刊行されたのは、中国戦線に加え東南アジアにも戦地が拡大し、それに応じて同仁会診療班や防疫班の派遣先も海南島・タイ・ビルマ・シンガポールへと広がった時期であった。内容は、そうした土地に赴任した同仁会職員による中国や東南アジアの疾病や衛生事情、診療報告といった医療関係の記事のほか、その土地の年中行事や民俗を描いた随筆、日常を詠んだ詩、短歌、俳句などが掲載。診療班による診療報告には、宣撫医療の実態が詳しく記述、防疫班についても、コレラなどの感染症流行時に、昼夜兼行でなされた防疫作業の実態が記され、公式記録の検査の数値などからは到底知ることができない苛酷な現場の状況がみえてくる。

日中戦争期（1937年～）に大きな問題となったのが、戦禍に見舞われた土地で発生するコレラ等の伝染病であった



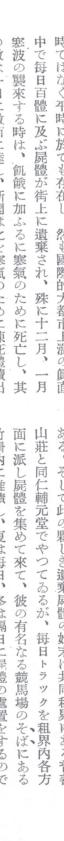
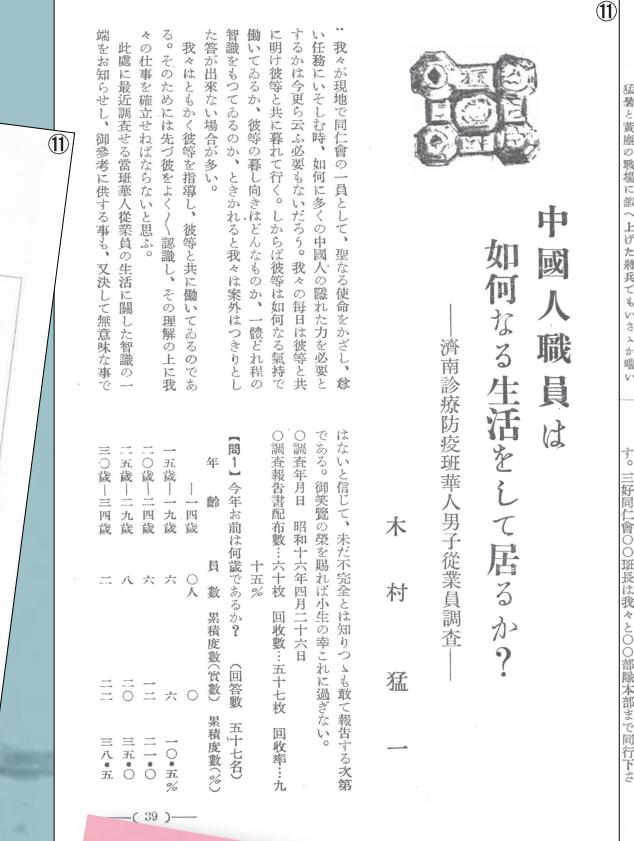
疗 診 ノ 班 第 一



⑫

⑫『中北支一ヶ月の旅（附録：支那事変上海戦勃発當時中国救護班の活動（上海市救護委員会医務組工作報告）』

医学者である伊藤正雄が、1938年、戦時下の華北・華中を訪問した際の旅行記。今回この資料を収録したのは、伊藤が中国における医学研究の状況を先入観なしに公平に評価し、さらに特筆すべきは附録の存在である。これは、上海が日本軍により攻撃を受けた時、自発的に馳せ参じた中国人で組織された上海市救護委員会が作成した救護状況報告書である。伊藤は、これを上海でたまたま入手して読み、救護活動全般について詳細かつ正確に記録されていることに興味を覚えて訳出したと記す。

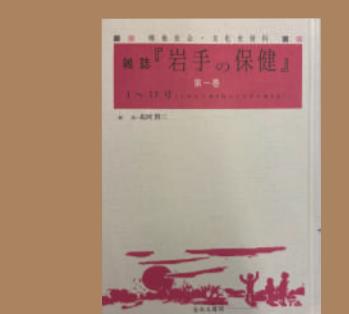


『岩手の保健』大牟羅良生誕100周年記念復刻

◎解説 北河 賢三 摘価 255,000円【全十四巻・別冊】

おススメしたい人……

近現代史／植民地／医学史／
医史学帝国日本／科学史／東
アジア近代科学史／朝鮮近代
医学史／満洲史など



外地「いのち」の資料集(一)

—「朝鮮総督府医院年報」附「朝鮮医育史」

◎編・解題 慎 蒼健 摘価 88,000円【全五・別巻】

外地「いのち」の資料集(二)—「満洲医科大学」

◎編・解題 末永 恵子 摘価 58,000円【全四・別巻】

外地「いのち」の資料集(三)

—「満洲・朝鮮・台湾の感染症 ペスト・コレラの記録」

◎編 金沢文庫編集部 摘価 98,000円【全八・別巻】

外地「いのち」の資料集(四)

—「台湾総督府医院年報」

◎編・解題 鈴木 哲造 摘価 80,000円【全六巻・別冊】